

# 『平家物語』 大宰府落と漢詩文

——王昭君説話などの利用について——

北 山 円 正

—

平家一門が安徳天皇を奉じて西国へ落ち、九州の宇佐八幡宮、大宰府から東へ向かい、その後行在所を讃岐国の屋島と定めたのは、寿永二（一一八三）年十月の頃であつた。都の方を目指しているとは言え、大宰府にいた時に、緒方維義が三万余の軍勢で押し寄せてくるとの報に接して、慌ててその地を離れて箱崎へと逃れるような始末であつた。そして山賀・柳ヶ浦へと行宮を移すと、今度は長門の国から源氏が寄せてくるとの聞こえがあり、やむを得ず四国へ渡らねばならなかつた。箱崎へ向かう途次は、「折りふしくたる雨車軸のごとし。吹く風砂をあぐとかや」と風雨にたたられている。また、険阻な山を越え、遙かな砂地を進む苦難を、「かの玄奘三蔵の流沙・葱嶺を凌がれけん苦しきも、これにはいかでかまざるべき」と強調している。それに、重盛の三男左中将清経は、一門の衰勢を顧みて、生きながらえまいと思ひ定め、入

水をはかる。つまり物語は、平家の滅亡は自明のこととして、描いていけると見るべきであろう。屋島到着後の一門の悲愁・嗟嘆は次のとおり。

その程はあやしの民屋を皇居とするに及ばねば、舟を御所とぞ定めける。大臣殿以下の卿相雲客、（海士の蓬屋に日を送り、しづが臥所に夜をかさね、龍頭鷄首を海中に浮かべ、浪の上の行宮は静かなる時なし。）月をひたせる潮のふかき愁ひに沈み、（洲崎にさ霜をおほへる蘆の葉のもろき命をあやぶむ。そはゐにはぐ千鳥の声は、曉恨みをまし、）遠松に白鷺の群れかかる梶の音、夜半に心を傷ましむ。（野雁の遼海に鳴くゐるをみては、源氏の旗をあぐるかと疑ひ、を聞きては、）兵どもの夜すがら舟をこぐかと驚かる。（青嵐はだへをかし、翠黛紅顔の色やうやう衰へ、蒼波眼穿ちて、外都望郷の涙おさへがたし。

翠帳紅閨にかはれるは、土生はなの小屋の蘆あしすだれ、

薰爐の煙にことなるは、蘆火あしたく屋のいやしきにつけても、

女房たちつきせぬもの物思ひに、

紅の涙せきあへねば、  
翠あざの黛くろ乱れつつ、

その人とも見えたまはず。

この部分は、右のように書き改めてみると、対句を多用していることが明らかである。たとえば、

遠松に白鷺の群れゐるをみては、源氏の旗をあぐるかと疑

ひ、  
野雁の遼海に鳴くを聞きては、兵どもの夜すがら舟をこく

かと驚かる。

は、傍線を引いた向かい合う句が対をなしている。漢文の語法で言う隔句対である。ただし、「遠松に白鷺の」に対する「野雁の遼海に」は、「遼海に野雁の」とあつた方が語順は整う。また、「夜すがら」に対応する語句が「源氏の旗を」の句には見えない。漢詩文なら字数や表現内容を揃えるなどの配慮があるものだが、ここでは和文の常と考えて、そこまでの厳密さを求める必要はない。十分対句の構造は確保していると評してよいであろう。むしろ、筆者が整った対を構成した苦心を思うべきである。なお「翠黛」の重複や、「翠帳」を含めた「翠」の繰り返し「紅顔」「紅閨」などと「紅」を多用する点は、やや拙いと言ふべきか。

また、それぞれの対句を作成するに当たっては、漢詩文表現の利用がある。漢詩文を基礎とした方が対は構成しやすかったのだ

あろう。現行の注釈書（新潮日本古典集成）には、漢詩を典拠とするとみる一二の指摘がある。「翠黛紅顔の色」については、

みどりの眉墨と血色のよい顔。美人の形容。「翠黛紅顔錦繡粧、  
泣なみだ尋もと沙塞サハサイ出で家郷カキョウ」〔和漢朗詠集〕王昭君、大江朝綱

「蒼波眼穿ちて」には、

「海漫々、風浩々、眼穿不み見蓬萊島」〔白氏文集〕海漫々

などに見える。右の詩句を収載する『和漢朗詠集』（巻下・699・王昭君）と『白氏文集』（巻三・0328・新樂府）は、当時広く読まれており、教養の書でもあつた。この物語に漢詩文を踏まえた表現のあることは周知のところである。

右の新潮日本古典集成の注から分かるように、漢詩文をどれほど活かしているのか、それによって何を描こうとしているかを検討するのは、『平家物語』を理解するためには必須であろう。本稿では、右の典拠およびこれに関連する漢詩文・和歌等を挙げながら、「大宰府落」の表現の持つ意味について考えてみたい。

## 二

まず、新潮日本古典集成が指摘する出典と、『平家物語』のこのくだりとの関わりについて検討してみよう。前者は、漢の元帝の代にあつた王昭君の悲話を詠じている。元帝の後宮には宮女が多いので、帝は画師に女性らの絵を描かせ、その中から選んで召した。宮女らは賄賂を使って自分を美しく描かせる中、王昭君の

みは美貌を恃んで賄賂を贈らなかつた。そのために醜く描かれてしまい、召されることはなかつた。そして匈奴の王が来朝して妻を求めてきた。元帝は件の絵をもとに、醜く描かれた王昭君を選んで与えることにする。別れの時に召したところ、絵とは異なり絶世の美女であることが分かつて後悔するが、やむなく「沙塞」へ遣わすことになったのである。前句の「翠黛紅顔」は王昭君の容姿について、「錦繡粧」はその衣裳について、それぞれ美しさを描いている。後句は、都を離れる時の王昭君の悲しみを詠じている。「翠黛紅顔の色」は、王昭君の哀話を想い起させ、平家の人々の容貌、就中その女人らの美しさや宿運に重ね合わせることを要めているのであろう。

後者が引く新樂府「海漫々」は、不老不死の薬を求める秦の始皇帝の命を受けた人々が、幾年も「蓬萊島」をさがす空しい航海を描いている。広大無辺の海を吹き渡る風の中、眼に穴があくほど見たところで「蓬萊島」は見つからない。船に乗った「童男卯女」もやがて老いてしまう。ありもしない仙薬、なれもしない仙人を求めるなど無駄なことに、苦言を呈している。「蒼波眼穿ちて」は、「蒼波」が「眼」を「穿つ」のではなく、「蒼波」をひたすら見つめるの意。「外都望郷の涙おさへがたし」がつづくところからすると、広々とした海の方にある都を思い描きながら、帰京の願いを募らせていたことであらう。求めるという点は共通するが、「海漫々」と『平家物語』のこの部分の内容とはかなり異なっている。

ほかにも漢詩文を踏まえた表現があるので取り上げてみよう。先に触れた「野雁の遼海に鳴くを聞きては、兵<sup>つは</sup>どもの夜すがら舟をこぐかと驚かる」は、洋上を渡る雁の鳴き声を、船を漕ぐ音と聞きなしたということである。これは、中唐白居易の、

晴虹橋影出、秋雁槽声来（『白氏文集』巻五十四・2495、「河亭晴望」）

にもとづく。やつてきた秋雁の鳴き声が槽を漕ぐ音のように聞こえた<sup>(3)</sup>と詠んでいる。平安朝にはこの表現をしばしば受け入れており、

雲叫雁。声疑槽動。風吹鷁首。怪帆留。（『田氏家集』卷之上・61、「秋日諸客会飲、賦屏風一物、得舟」）

下弦秋月空驚影、寒槽晚舟欲乱声（『菅家文章』巻四・

265、「聞早雁、寄文進士」）

碧紗窓下槽声幽、聞說瀟々旅雁秋（同巻五・349、「重陽後朝、

同賦秋雁槽声来、応製」）

と詠じている。これらが背景となつて、『新撰万葉集』（巻上・

117・秋）・『寛平御時后宮歌合』（110・秋歌）・『古今集』（巻四・

212・秋上・寛平御時后宮歌合の歌・藤原菅根）に、

秋風に声<sup>こゑ</sup>をほにあげて来る船は天の門渡る雁にぞありける

と、詠じるようになる。このうち『新撰万葉集』（117）には、「唳

唳秋。雁乱。碧空。濤音槽。響相同」（118）と、同趣の詩を付している。

寛平・延喜頃には浸透していた表現と言えよう。

これ以後、

驚<sup>レ</sup>弓斜<sup>レ</sup>避三更月、引<sup>レ</sup>槽遙過万里雲〔新撰朗詠集〕卷上・

302・雁、村上天皇〔成<sup>レ</sup>行寒<sup>レ</sup>雁去〕

雲衣范叔羈中贈、風槽瀟湘浪上舟〔和漢朗詠集〕卷上・

323・雁、具平親王

急響似<sup>レ</sup>機暗破<sup>レ</sup>嬌闌之睡、寒声乱<sup>レ</sup>槽。忽伴<sup>レ</sup>漁舟之遊。〔本朝文粹〕卷十一・339、大江朝綱「重陽日侍<sup>レ</sup>宴、同賦<sup>二</sup>寒<sup>一</sup>雁

識<sup>二</sup>秋天<sup>一</sup>、応<sup>レ</sup>製<sup>二</sup>序<sup>一</sup>〕

対<sup>二</sup>此寒燈之耿々<sup>一</sup>、聞<sup>二</sup>彼風槽之邕々<sup>一</sup>〔詩序集〕下・24、

藤原公明「冬夜於<sup>二</sup>藤二千石文亭<sup>一</sup>、同賦<sup>二</sup>夜深聞<sup>レ</sup>遠雁<sup>一</sup>詩<sup>二</sup>序<sup>一</sup>」

雁が音はみふねの山や越えくらん樹かけたりと天つ声する〔惠慶集〕230

かり

小夜ふけて空に唐槽の音すなり天のと渡る舟やあるらん〔江

帥集〕88・秋

旅宿雁

舟人も聞き渡れとや雁が音の声高砂に唐槽ひくらん〔風情

集〕196

などと、漢詩文・和歌において詠み込んでいる。また物語でも、

沖より舟どものうたひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。ほ

のかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やらるるも、心細げな

るに、雁の連ねて鳴く声楫の音にまがへるを、うちながめた

まひて〔源氏物語〕・須磨

と、見える。また、槽を漕ぐ音を雁の鳴く声に見立てた、

船中には唐槽おす声、秋の雁を眺めて、夏の空に行くもあり

〔海道記〕

のような紀行における例もある。島田忠臣・菅原道真の詩以降、種々の文学作品にしばしば見受ける表現である。雁の鳴く声を槽の音に喩える基本線を逸脱せず、ほぼ同じ用法で一貫している。〔太宰府落〕でもそれは変わっていない。

もう一つ挙げておこう。「月をひたせる潮<sup>しほ</sup>のふかき愁ひに沈み」

と、潮が月を浸すと描くところについては、白居易「琵琶行」（卷十二・803）の「醉<sup>レ</sup>不成<sup>レ</sup>歡<sup>レ</sup>慘<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>別、別時茫茫江浸<sup>レ</sup>月」を想起するべきであろう。詩人は旅立つ人を見送り、酒を酌み交わす酔いはするが盛り上がりがないまま別れようとする。その時どこまでも広がる長江が月影を映していた。川や海が月を浸すという表現は、白詩以前に類例がないようである。このくだりを描くに当たって、「琵琶行」が念頭にあったのは間違いないだろう。もとより平安朝の詩文における、

懸<sup>二</sup>鸞鏡於波心<sup>一</sup>、似<sup>二</sup>楊州之鑄出<sup>一</sup>、浸<sup>二</sup>氷綯於潭面<sup>一</sup>、如<sup>二</sup>泉室

之織成<sup>一</sup>〔本朝文粹〕卷八・209、菅原淳茂「八月十五夜、

侍<sup>二</sup>亭子院<sup>一</sup>、同賦<sup>二</sup>月影滿<sup>二</sup>秋池<sup>一</sup>、応<sup>二</sup>太上法皇製<sup>一</sup>」序。「氷綯」

は月の比喩）

去衣曳<sup>レ</sup>浪霞<sup>レ</sup>応<sup>レ</sup>濕、行燭浸<sup>レ</sup>流月<sup>レ</sup>欲<sup>レ</sup>消〔和漢朗詠集〕卷上・

216・七夕、菅原文時。「行燭」は月の比喩）

掉<sup>フル</sup>尾魚驚<sup>△</sup>明月浸<sup>△</sup>、鑑<sup>ミル</sup>顔人対碧霄深〔類聚句題抄〕249、源

為憲「池清知<sup>二</sup>雨晴<sup>一</sup>」

嶺泉浸<sup>レ</sup>月秋声白、石磴帶<sup>レ</sup>苔暮跡青（『本朝無題詩』卷九・

644、藤原敦光「秋日双輪寺即事」）

なども作者の視野に入っていたのであろう。こういう漢詩文が、ここでの表現の源泉となっていると見てよいのではないか。

さらに指摘があつてよいと思われる出典を挙げておこう。「翠帳紅闌」は、みどりの帳の中の赤い闌つまり女人（平家の女性たち）の居室である。それとは異なる「土生の小屋」の蘆の簾を下ろした部屋で過ごさなければならないとある。その「翠帳紅闌」は、

翠帳紅闌、万事之礼法雖<sup>レ</sup>異、舟中浪上、一生之歡会是同（『和漢朗詠集』卷下・719・遊女、大江以言。『本朝文粹』卷九・

238、「見遊女」序）

をもとにしているのではないか。遊女は、飾られた居室とは異なる「舟中浪上」で、男性の相手をする。かたや平家の高貴な女人らは、本来いるはずの房室ではなく、浪間に漂う粗末な小屋で暮らしを余儀なくされている。以言の詩序に見える居室の対比を巧みに応用したと評してよいであらう。

以上、「大宰府落」の表現における漢詩文の利用を、気づいた範囲で指摘してみた。白詩や『和漢朗詠集』等々のよく知られた語句や修辭を織り交ぜながら述作していることが分かる。本稿はその過程を知ろうとしたささやかな試みであり、こういった作業を積み重ねれば、この物語の読みが深まりはしないかと思う。

### 三

取り上げてきた「大宰府落」には、語彙・語句の出処が明確なものが多く、さきに示したとおりである。これに對して、ある説話の内容を踏まえた表現・くだりがある。それは、新潮日本古典集成の注が指摘する王昭君にまつわる哀話である。大江朝綱「翠黛紅顏」云々（『和漢朗詠集』卷下・王昭君）のみにとどまらず、さきに引用した「大宰府落」には、王昭君の物語の広範な表現が背景にある。『平家物語』の作者がそれをどのように活かして描いたかを検討したい。

王昭君が匈奴の国へ向けて旅をしなければならないのは、平家一門が西国へ落ちねばならなかったことと重なる。人々は望郷の思いに駆られて、都の方を望み見る。それを次のように描いている。

蒼波眼穿ちて、外都望郷の涙おさへがたし。

王昭君を詠じた詩には、

行行常望長安日、曙色東方不忍<sup>レ</sup>看（『凌雲集』85、滋野貞主「王昭君」）

身埋胡塞千重雪、眼尽巴山一点雲（『新撰朗詠集』卷下・

654・王昭君、三善清行）

のように、都長安の方を見つめる昭君の姿を描くことがある。ただし、右のように太陽や山にかかる雲を望む例は少ない。王昭君との関連で多く見えるのは、西方の砂漠地帯から眺める、漢土に

かかる月つまり「漢月」である。

秋簷照漢月、愁帳入胡風（『梁府詩集』卷二十九、梁簡文帝「昭君詞」）

金鉶明漢月、玉筍染胡塵（同、初唐駱賓王「王昭君」）

漢月正南遠、燕山直北寒（同、初唐董思恭「王昭君」）

都の方に照る月光が昭君に降り注ぐ、または、はるか真南つまり都の方向に月が浮ぶとある。もちろん、昭君が望郷の念にかられながら見つめているのである。

唯余長安月、照送幾重山（『文華秀麗集』卷中・62、嵯峨天皇「王昭君」）

胡角一声霜後夢、漢宮万里月前腸（『和漢朗詠集』卷下・

701・王昭君、大江朝綱）

漢月不知懷土淚、辺雲空媿惜金名（『江吏部集』卷中、「王昭君」。『新撰朗詠集』卷下・697・王昭君）

の第一例は、都を振り返って見た月であり、第二例は、遙かかなたにある漢の宮廷を思うと、月下の我が腸はちぎれんばかり、最後の例は、漢土の方角の月は都を思つて流す涙など知らぬと詠じている。都の方にある月を見つめている姿を、中国の詩よりも明確に表現していると言える。

王昭君は、いかんともしがたい状況下、唯一自分と都をつなぐよすがである月を眺めながら、望郷の思いを募らせている。この姿は、つらさや悲しみを抱えて耐え忍ぶしかない、平家の女人らの非情な運命と類似している。月と海原との違いはあるものの、

ともにかなたにある都を思い描きつつ、望み見る姿は共通しており、悲運を際立たせている。

次に、

青嵐はだへををかし、翠黛紅顔の色やうやう衰へ、

を取り上げる。「翠黛紅顔」は、先に引いた大江朝綱の詩（『和漢朗詠集』・王昭君）に描くとおり、昭君の美しさを象徴する表現であった。平家の女人たちの美形は昭君のようであったというのであろう。このあたりの女性描写の背後に、王昭君の悲話のあることを示唆していると見てよい。西下以後の長い旅の疲れや辛苦によつて、女人らの美貌（翠黛紅顔の色）も次第に衰えていったのであろう。その上馴れぬ潮風にさらされて、衰えに拍車を掛けたにちがいない。王昭君の詩には、西下の途次や匈奴の地において、寒風に吹かれ砂塵にまみれたために、容貌が変化したと詠じるものが多い。

滿面胡沙滿鬢風、眉銷殘黛臉銷紅。愁苦辛勤顛顛尽、如今却似「画」中（『白氏文集』卷十四・805、「王昭君二首」ノ一。後の二句は、『和漢朗詠集』卷下・697・王昭君に収載）胡の国の沙や風にさらされて美しさが消え、苦勞の果てに、かつて画師が描いたような醜貌になってしまったとある。

君王若問妾顔色、莫道不如「宮裏時」（同右・806、「王昭君二首」ノ二）

は、王昭君が漢の使いに、容貌が都にいた時より劣っているとは言うなど述べる。この詩も、美しさの衰えを強調している。

昭君の容色の衰えは、白居易以前の詩でも描いている。たとえば、  
胡風犯肌骨、非直傷綺羅（『樂府詩集』卷二十九、梁沈約「明君詞」）

斂眉光祿塞、遙望夫人城。片片紅顏落、双双淚眼生（同、北周庾信「明君詞」）

白嫁單于國、長銜漢掖悲。容顏日憔悴、有甚畫圖時（同、初唐郭震「王昭君三首」ノ一）

燕支長寒雪作花、蛾眉憔悴沒胡沙。（同、盛唐李白「王昭君二首」ノ一）

胡國の風が吹き付けて、装いのみならず容貌をそこない、胡地にあつて美貌が衰え、蛾眉はやつれて砂中に埋もれ、醜く描かれた絵より容色は衰えていると、それぞれ詠じている。

平安初期の詩においても、次のように見える。

画眉逢雪壞、裁髮為風殘（『文華秀麗集』卷中・65、  
画眉逢雪壞、裁髮為風殘（『文華秀麗集』卷中・65、

朝野鹿取「奉和」王昭君二）

青虫鬢影風吹破、黃月顏粧雪点殘。……料識腰圍損昔日、

何勞每向鏡中看（『経国集』卷十四・191、小野末嗣「奉試賦得」王昭君）

髪は乱れて化粧はくずれ、その体軀は見る影もなく、かつて放っていた輝きが失われていたとある。末嗣の詩は、以前の体型を損なっている、鏡に向かうまでもないと美を失った嘆きを述べている。匈奴の国での辛勞・苦難をしのげる。

さらに和歌においても、

衰ふる鄙の別れの悲しさに傷なき玉の身をぞうらむる（『永久百首』637・王昭君・常陸）

なげく間に鏡の影ぞかはりゆくこや絵に描ける姿なるらん（『為忠家初度百首』730・王昭君）

九番 左 王昭君

源仲綱

なげきつつ衰へにける我が身かなこや描きかへし姿なるらん

（『治承三十六人歌合』167）

王昭君

絵に描ける昔の人はやつれぬるこの姿をやかねて知りけん

（『親盛集』99。『月詒和歌集』797・雑下）

と、「かはり」「衰ふる（へ）」「やつれ」などの語を詠み込み、匈奴の地へ向つてからの容姿の変化を描いている。

王昭君の姿は、厳しい風に吹かれ、砂塵にまみれてしまい、そして身の不運への悲嘆や都への思いなどによって、美貌をそこなう。一方平家の「女房たち」は、船上で海風にさらされ、望郷や一族の行く末などの「つきせぬもの物思ひ」を抱えて、容姿が衰えて行く。両者には重なることが多い。

もう一つ取り上げよう。

女房たちつきせぬもの物思ひに、紅の涙せきあへねば、翠の黛乱れつつ、その人とも見えたまはず。

「物思ひ」によつて、かつての容姿は今では見る影もないありさまだと述べて、この部分を締めくくっている。「その人とも見えたまはず」とはどういうことであろうか。容貌が衰えて以前のあ

の人とは見えないということがあるが、なぜこのような表現をするのかを考えてみたい。ここについては、すでに引いた白居易の、

満面胡沙満し鬢風、眉銷殘黛臉銷紅。愁苦辛勤顛顛尽、

如今却似「画图中」(『白氏文集』、「王昭君二首」ノ一。後の

二句は、『和漢朗詠集』巻下・697・王昭君)

つまり、以前の美しさもすっかり衰えてしまい、今では、画師がいつわって描いた醜い姿に似ていると詠じる詩を踏まえているのであろう。王昭君は、匈奴の地へ来て、画中の姿のようになってしまった。そのように平家の女人たちも、「翠黛」つまり美しさが失われ、とてもあの人とは見えないような容貌になってしまったと言っているのである。

「大宰府落」のこのくだりは、王昭君の悲運・容色の衰えにまつわる説話を取り入れながら形作ったと見てよいであろう。特に女人の形象においてはたした役割には注視しなければならない。举例によって明らかかとおり、その中核は漢詩文である。中でも白詩の占める位置は大きいのではないか。

#### 四

『平家物語』(寛一本)における「王昭君」の語は、「元暦二年の春の暮」に、壇ノ浦の戦が終わって、源氏方に捕らわれた、国母建礼門院徳子をはじめとする女人たちと内大臣平宗盛以下の武将らが、都へ連れて行かれるところに、

あるは朱買臣が錦を着ざることを嘆き、あるは王昭君が胡国におもむきし恨みもかくやとぞ悲しみたまひける(巻十一・

内侍所都入)

と見える。女人らを王昭君に見立てて、捕われの身としての都への帰還を「悲し」むと描いている。都にもどることに喜びはなく、敵軍とともに行かねばならない屈辱・悲嘆を表現するために「王昭君」を引き合いに出している。

巻八・緒環に、西国へ落ちた平家一門が宇佐八幡宮にとどまり、九月十三夜に武将らが月を眺めて和歌を詠じる。その平経正の歌は、

分けてこし野辺の露とも消えずして思はぬ里の月を見るかな

(巻八・緒環)

草原をかき分けて旅をつづけ、思いもしなかった西国の地で、これまでと同じ月を見ることがと、漂泊の身の上を歎いている。この場面は、寿永二(一一八二)年のことであるが、実は寿永元年十一月成立の『月詣和歌集』(巻九・796・雑下)に、「王昭君の心をよめる」の詞書で収載している。経正が「緒環」の時点でこの歌を詠むはずはない。それはともかくとして、昭君の説話を踏まえた和歌を物語中に用いている。

右の二例以外にも、「大宰府落」で昭君の説話を活かしていた。王昭君の名が見えないので分かりにくいだが、漢詩文に多少の嗜みがあり、昭君の悲話を知る者は、その背景がいかなるものであるかは察したであろう。もとよりすでに触れた白居易の「琵琶行」



や新楽府「海漫々」などの詩文を活かしている点についても、容易に知り得るにちがいない。平家の悲運を描くに当たって、よく知られた漢詩文や説話を用いていると了解するなら、その奥深さを味わうことに繋がるのではあるまいか。

#### 注

(1) 本文は日本古典文学大系を用いた。表記・句読点・振り仮名等は便宜によって改めたところがある。

(2) ここを、古典大系の本文は「清風」に作るが、対をなす「蒼波」から考えて、「青風」と改めた。ただこの語は、

未<sub>レ</sub>夜青風入、先<sub>レ</sub>秋白露团（『白氏文集』卷十五・0809、

「題<sub>二</sub>盧秘書夏日新栽竹<sub>一</sub>二十韻」）

好<sub>レ</sub>看落日斜銜処、一片青風映<sub>二</sub>半環<sub>一</sub>（『千載佳句』上・

257・月、白居易。『白氏文集』の通行本である那波本（卷

十五・0834、「高亭」）は、「青風」を「春風」に作る。）

曉入<sub>二</sub>長松之洞<sub>一</sub>、巖泉咽嶺猿吟、夜宿<sub>二</sub>極浦之波<sub>一</sub>、青風吹

皓月冷（『和漢朗詠集』卷下・643・行旅、為雅）

とあるように、あおい山の気、山風の意であり、海上の風をあらわしている「大宰府落」のこの部分には合わない。また「晴風」もありうるかと思うが、これでは「蒼」とは対にならない。それに、

山吐<sub>二</sub>晴風<sub>一</sub>水放<sub>二</sub>光<sub>一</sub>、辛夷花白柳梢黄（『白氏文集』卷

十六・0915、「代<sub>二</sub>春贈<sub>一</sub>」）

と、晴れた日の山の気であり、これも相応しくない。語義からするといずれもこの場の状況に合わないが、ここでは色対を考慮して、ひとまず「青風」としておく。

(3) 白居易には、逆に槽の音を雁の鳴き声と聞いたと描く、

翠藻蔓長孔雀尾、彩船槽急寒雁声（『白氏文集』卷六十二・2968、「秋日与<sub>二</sub>張賓客<sub>一</sub>・舒著作<sub>一</sub>、同遊<sub>二</sub>龍門<sub>一</sub>、醉中狂歌。凡百三十八字」）

もある。なお、雁声と槽声の比喩表現については、小島憲之『古今集以前』196～198ページ参照。

(4) 白居易の詩には、「浸<sub>二</sub>月冷波千頃練<sub>一</sub>、苞<sub>二</sub>霜新橋万株金<sub>一</sub>」（『白氏文集』卷五十四・2440、「宿<sub>二</sub>湖中<sub>一</sub>」）と同様の表現がある。

(5) 平安文学における王昭君説話の受容については、田中幹子「王昭君」説話——「みるからに鏡の影のつらさかな」歌——（『和漢・新撰朗詠集の素材研究』所収）、岡崎真紀子「王昭君」の平安朝文学史」（『やまとことば表現論』源俊頼へ）所収）が詳細に論じており、本稿作成に当たって学恩をこうむった。

(6) 小島憲之『古今集以前』90～92ページ参照。

(7) 王昭君の容貌については、

王昭君をよめる  
懐田法師

見るからに鏡の影のつらさかなからざりせばかからま

しやは（『後拾遺集』卷十七・1018・雑三）

王昭君をよめる

見るからに鏡の影のつらさかなからざりせばかからま

しやは（『後拾遺集』卷十七・1018・雑三）

をめぐって、先に挙げたように、胡国へ赴く途次や胡国において衰えたとする理解と、

唐に王昭君と申す后ましましたけり。……胡国の人たまはりにけり。……さて国に行きつきて鏡を見るに、わろき所もなし。それを題にして、

みるからに……

これもやうやうに言ふめり。その道の人にたしかに可<sub>レ</sub>尋（『龍鳴抄』上）

と、胡国で鏡に映る姿を見て、この美貌がなければこんな所で悲しい思いをしただろうかという解釈もある。注（5）の二論考がこの点について触れている。

（8）末嗣の詩一首全体は、すでに引いた初唐董思恭の「王昭君」を踏まえて詠じている。このことについては、小島憲之『上代日本文学与中国文学下』1596～1598ページ参照。